今日の人文地理学

—Tim Cresswell の近業に沿って—（２）

松　尾　容　孝*

1　はじめに

⑴　目的

⑵　Tim Cresswell の地理学

⑶　分胞する人文地理学にとっての学史の意義

2　科学の模索

⑴　地域：普遍（一般）と個別（特殊）の関係を軸に

⑵　空間論—目的と現実の乖離—

⑶　大理論の終焉と主体の復権　　ここまで前号

3　新たな差異への注目：モダニズムからの離陸　　ここから本号

⑴　フェミニスト地理学をはじめとする「(社会的）位置の地理学」

⑵　ポストモダニズムの展開動向

4　新たな人文地理学のゆくえ

⑴　ポスト構造主義地理学の誕生：時間地理学から構造化理論を経て

⑵　ポスト構造主義の展開：関係性の空間・場所，非表象理論（NRT)，アフターネットワーク理論（ANT）

5　結びにかえて

＊専修大学文学部教授

3　新たな差異への注目：モダニズムからの離陸

⑴　フェミニスト地理学をはじめとする「（社会的）位置の地理学」

空間論地理学（計量革命）は，論理実証主義と科学主義に基づいて自然地理学と同種の法則定立による地理学を推し進めようとした。しかし科学性を優先し，そぐわない研究を排除する傾向があったため，広範な研究領域をゆるく結びつけて成り立ってきた地理学を窒息させた。空間論地理学は，短い隆盛の後，多くの批判を受けるにいたった。空間論地理学の方向性は，それ以前の地理学と非常に異なったし，その後の地理学との差異も大きい。GIS 分析の開発・向上と，明示的厳密さをもたらした功績は大きいが，1970～80年代にはマルキスト地理学と人文主義地理学が代わって二大潮流になった。

では1980年代以降，この二大潮流はどのような流れへと形を変えたのか。Chris　Philo ファイロ（2005）は，20世紀後半の人文地理学における方法論の展開をリーディングズによってふりかえり，諸潮流の流れと相互関係を図１のように示した。図は，空間論地理学がその前後の人文地理学と断絶の程度が大きいこと，1970年前後からマルキスト地理学と人文主義地理学が台頭し，1980年前後からはさまざまなタイプの人文地理学が群生していることを示している。マルキスト地理学は構造主義的かつ経済学的で，空間的不均等や空間的分離の研究，景観や意味を社会的生産物として扱う視角とテーマを誕生させた。人文主義地理学は，その後の文化地理学の隆盛をもたらした。時にマルキスト地理学の影響もうけつつ社会・政治・経済と結びついて形成される文化の重要性を認識させた。新たな文化研究＝文化論的転回（カルチュラルターン）を促し，人文地理学の諸分野における文化への関心を興隆させた。従来は景観を通じて間接的にアプローチしていた非可視的なテーマである意味・経験・解釈やアイデンティティなど

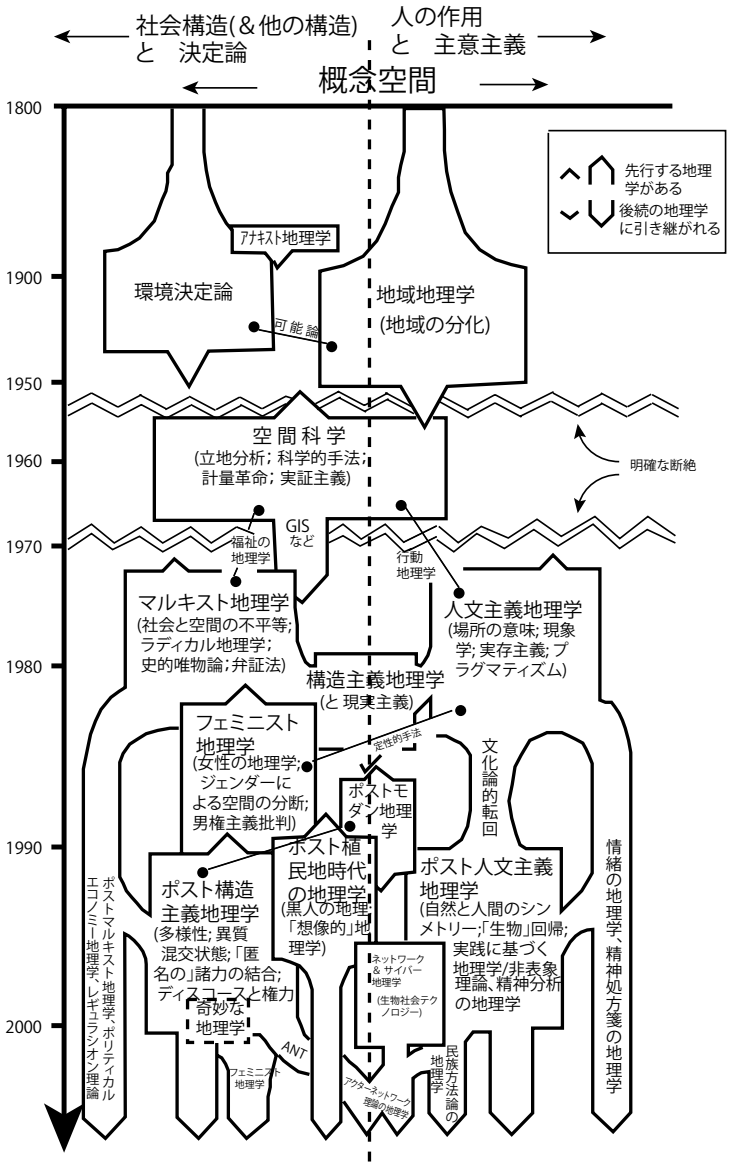

図１　変化する人文地理学の手法・方法論

注）Chris Philo（2008）の図を、日本語に改変

の研究に積極的に取り組む流れができた。こうして，大理論および地表構成物への対象限定からの脱却が，人文地理学において加速した。

マルキスト地理学や人文主義地理学が大理論への志向性を完全には払拭できなかったのに対して，1980年前後から群生した人文地理学は，大理論を指向せず，従来の人文地理学に欠けていた点を指摘し，従来との「差異」に留意して，異なる地理学を作ることをめざしたといえよう。本章において，その主要な動向を検討しよう。

まずフェミニスト地理学，それに続いて，何がしかの立場から，従来の地理学が重視してこなかった視点や対象を扱う地理学，つまり Peter Jackson ジャクソンが言う“positioned geography”「(社会的) 位置の地理学，立場からの地理学」がある (Peter Jackson 1993)。

白人男性の価値観や行動に基づいた地理学が長く主流をなしてきた。現実世界における男と女の力関係が地理学に反映していた。フェミニストやフェミニズムは，はばかられ縁辺に押しやられた言葉として，人々の意識が操作されていた。それゆえ逆に，「フェミニズム」はわれわれが住む世界について多くのことを思想と実際の両面で教えてくれる。これまでうずもれてきた女性の声や考えを再評価するため，地理学史を再考する努力が女性によって行われるに至った。マルキスト地理学も人文主義地理学もこの点ではほとんど何の役割もはたしてこなかった。

イギリス地理学会において1980年代初頭に「女性と地理学」研究グループが結成され，1984年に『地理学とジェンダー：フェミニスト地理学序説』が出版された。生物学的範疇としての sex と社会的構成としての gender の区別の必要性，家父長制や男権主義による観念や知識の社会的生産，ジェンダー化によるそれらの生産からの女性の疎外が指摘された。男権主義による知識群・知識体系を脱構築するため，フェミニスト認識論の必要性が主張された。研究グループ内においても意見が分かれ，フェミニスト地理学を人文地理学の中にどのように位置づけるのかについて統一的な合意形

成は困難であった。

それでも，知識の構築に果たすジェンダーの役割の重要性は具体的に示された。たとえば，都市における犯罪や恐怖の空間・場所に対するマスメディアの報道と女性が実際に危険を感じる場所のミスマッチ，女性や貧困層やマイノリティが主に用いるバス移動と白人通勤者が主に用いる自動車・電車・ライトレールでの移動との相違や両交通手段間の対立，経済開発は家族から労働を奪い市場経済に特化しやすいがゆえに途上国の開発に果たす女性の役割が重要だとの指摘，環境問題に対しては環境汚染の被害を受けるのは女性のほうが深刻であること（ex 妊娠や避難時の体力差），女性を自然と関連づける伝統（ex 母なる大地）は男性主体の産物であり自然がそれ自体自浄作用をもつかのように錯覚させて事の本質から目をそらさせる危険があること，などである。

1990年代には，ジェンダーの二分法を乗り越えて，差異を強調するのではなく多様なアイデンティティを踏まえて考察する重要性が指摘されるに至った。フェミニスト地理学も同じように黒人の声・主題を欠くことに気づいた反省からである。心理的葛藤を抱きながらも，男権主義の下で構築された理論の活用も含め，教条的にではなく模索しながら実践的に研究する必要を共有する状況にある。

フェミニスト地理学の興隆を受けて，さまざまな社会集団が自らの立場に沿って，従来の地理学が見過ごしてきた地理学的テーマや視角を主張する，「（社会的）位置の地理学」ないし「立場からの地理学」が起こった。ファイロによる「他者」視点の重要性の指摘も同じ考え方に基づく。ファイロは，イギリスにおいて農村社会問題が顕在化するなかで，「他者」＝無視された人々やマイノリティへの注目の必要性を主張した（C. Philo 1995）。

「位置の地理学」を最も活発に展開したのは，ポスト植民地時代の地理学である。初期の *Antipodes* は人種・民族による空間的不平等（南アフリ

カのアパルトヘイト，ネーティヴアメリカンの都市経験，アメリカ合衆国の地理の教科書が黒人の歴史を消し去る傾向など）の論文で特徴づけられていた。1972年は黒人の地理学の特集号であった。黒人自身の生活世界での経験と価値観に基づいた黒人コミュニティの地理的想像力が白人コミュニティのそれとどのように異なるのかを検討している。

フェミニスト地理学をはじめとする「位置の地理学」は，新たな認識論に立脚することによって促進された。従来は，「科学知識は客観的で価値自由で偏りがない」との信念に基づいていた。これに対して，「位置の地理学」は，知識は身体の中で生産され，男女，人種，民族，国籍・出自などにより異なる，社会的構成物である，と考える。フェミニスト地理学者は，Sandra Harding ハーディング（1986）の「あらゆる知識はそれを作り出す人の立場からのみ有効である」＝立場理論や，Donna Haraway ハラウェイ（1988）の「個々の文脈下で認識される知識形態のほうが普遍・自然を装う知識形態よりも信頼に値する」＝認識主体にとっての知識の重視の認識論を支柱として，実践している。

⑵ ポストモダニズムの展開動向

モダニズム（近代主義）は合理性と効率性で特徴づけられる。全体を対象にした，還元主義・本質主義の大理論（メタナラティヴ）を好み，均質で適用性の高い製品を大量生産するフォーディズム主義であり，差異への関心が薄かった。空間に対しても，厳格な幾何学が卓越し，局地的な文脈への注意は二次的であった。進歩主義を信奉し，場所の違いにかかわらず，同じものが形成された。これに対して，ポストモダニズムは，「均質化」とは逆の傾向を示し，多様な学問分野の時代精神のもとで，「差異」に注目した。哲学者 Gilles Deleuze ジル・ドゥルーズや Pierre-Félix Guattari ピエール＝フェリックス・ガタリらの新しい思考法が注目された。「生成の哲学」者と称されたドゥルーズは，「差異」や「管理社会」のような新し

い概念を作り出して，現代社会の特色を浮き彫りにした。Michel Foucault ミシェル・フーコー（1986）は，「他の空間群について」において，現代（ポストモダニズム）は空間の時代，同時性の時代，並列性の時代であり，一群の点と点を結び，交差するネットワークとして世界を経験する時代だと論じた。空間は社会を構成する活発で動的な要素であることを証明しようとする地理学者に，空間を重視するフーコーの言明は大変人気がある。

モダニズムとポストモダニズムの相違を，Pruitte-Igoe 住居と Bonaventure ホテルを例に挙げてクレスウェルは説明する。モダニズムの建築は社会の目的に建築が奉仕する。モダニズムの建築 Pruitte-Igoe は，厳格な幾何学に特徴づけられ，直線と直角が卓越し，局地的文脈にほとんど注意を払わない。合理性と効率性で特徴づけられた空間論理を優先し，同一的である。発展観を信奉し，合理性により人々の生活を改善しようとした。それゆえ，1972年の Pruitte-Igoe の破却は，この建物の失敗にとどまらず，モダニズムの後退を象徴づけた。

Bonaventure ホテルはポストモダニズムの典型的な建物である。「アーバンルネサンス」プロジェクトを手がけた建築家 John C. Portman の作品で，顧みられなくなった下町に，道路階の都市景観とは断絶したガラス張りの建物を複数建ててそれらを空中回廊でつなぐ。都市の中に別の都市をつくり，金持ちと貧乏人を分離し，建物に外部から決して侵入できないようにする。ポートマンは，北京や上海を畏怖の念を起こさせる新世紀の都市にしたのにもかかわっている。モダニズムの建物と同じく，それが建つ場所に対して関心を払わないが，モダニズムと異なって，建物内部のデザインに空間的論理を施さず，空間的混乱をデザインする。環境に適応したデザインを施すのではなく，自らの論理に沿って空間をデザインし，主体的に差異を構築する。

1980年代後半には，現在身の回りにある多くの出来事が出現した。第二次大戦後の科学の失敗（原子力爆弾，緑の革命），マルクス主義政治運動

の失敗（ソヴィエト，中国），資本主義の失敗（自由市場，開発）などである。「理性」や「合理性」への信奉が弱まり，大きなイデオロギーに代わって，小さな問題群に焦点を当てるようになった。政治社会運動も，動物愛護，フェアトレードなど，単一の問題について結成・活動するようになった。ポストモダニズムの時代に移行し，普遍の価値や普遍的存在を当然視する本質論の考え方は背後に退き，思考の相対化が加速した。パラダイム論争は過去のものとなり，普遍的価値，普遍的存在や本質に代わって，空間が示す多彩な差異や主体的な空間の構築に注目し，個々の差異をローカルな条件を重視して深く解釈するにいたった。さらに，真実や現実自体を表象（イメージ）の産物とみなす考え方が流布し，広く受容されるようになった。これらの個別化・相対化はまた，空間的規模を価値の大小に読み替える従来の空間論に代わって，空間の並列的な認識の仕方を広めた。

民族は社会的文化的構成物だとの主張が，1980年代，ポストモダニズムの興隆とともになされるようになった。レプリゼンテーション（表象，イメージ・伝説）に関して，ポストモダニズムの出現以前は，どの主義・思潮に立とうとも「世の中に真や存在を踏まえた意味がありそれを表象している」との前提があった。しかし，ポストモダニズムはこの前提自体を受け入れず，世界の構築における表象の活発な役割を主張する。「表象の後にも先にも真実や現実など存在しない，表象が真実といわれるものを作る」（Jacques Derrida デリダ1974）。Jean Baudrillard ボードリヤールや Umberto Eco エーコも，「我々は模倣の世界に住んでいる。表象と真実の間に区別はなく，両者は同一である。オリジナルなどなく，存在しない世界が完全にコピーされる。これこそまさに超真実 hyper-reality である」と言う。これらの考えは，ポストモダン地理学において文化地理学ないし文化論的転回が興隆する背景要因をなした。地図史研究においても，ニュートラルに見える地図でさえ何らかの価値規範を反映した規則・基準をもつとの観点からの研究がなされた（Brian Harley，1989）。

ポストモダン地理学は，個別性・特殊性（詳細性）やユニークネスの重要性を主張し，areal differentiation 地域の分化，地域的差異を重視し，ローカルな説明を追求する。人類学者 Clifford Geertz ギアーツ（1973）の「深い地図化 deep mapping」や「分厚い描写 thick description」と軌を一にする。グレゴリー（1996）によれば，ポストパラダイム時代を走るポストモダン地理学では，個別への関心に際して，新たな理論的感度・感受性を装備しているので，我々が生きる世界に対して，深くローカルに沈潜した説明によって，場所・地域・ロカリティの生気と出会うことができる。Edward Soja ソージャ（1989，1999，2000）は，『ポストモダン地理学群』を示すとともに，多くの学問が空間への関心を高めていること，社会理論に空間を組み込むことが重要になっていること，そしてロサンゼルスがポストモダニズムを体現する都市であることを示した。ソージャ（1989, 1996），Mike Davis デーヴィス（1992），Michael Dear ディア（2000）は，ロサンゼルスを主題にポストモダン都市地理学を展開した。シカゴの同心円構造モデルに対して，ロサンゼルスは，自動車と高速道路の発達による「エッジシティ」，「私有住宅開発」privatopias（厳重な計画的規制と計画域外の入念な防御形態，ホームレス排除），ディズニーランド風を模倣して住民にイメージを売る都市「テーマパークシティ」などが混在する。農村研究においても，多様な形態の他者性・差異に注目して，Murdoch and Pratt（1993）が post-rural の諸相を指摘し，実りある研究を展開した。

ポストモダニズムのこのような指向性は，マーストンらの「スケールを除去した人文地理学」の主張と共通する（Sallie A. Marston et al，2005）。マーストンらは，空間の大小を重要性の大小に読み替える，垂直的・階層的な空間の捉え方に対して異議を申し立てる。代わって，「フラットな本体論（存在論）」を提起した。地点間で起こる相互作用においてそれぞれの地点はフラットな関係にある。一方，諸地点や環境場において諸力は相互に異なる方法で活性化する。その結果，差異に満ちた平面から形態が生

産される，とする空間論を提起した。

ポストモダニズムによる差異への注目に対して，マルクス主義地理学やフェミニスト地理学は，重要な差異とそうでない差異との弁別ができていない点が，ポストモダン地理学の欠点であると，批判する。差異への焦点の当て方を間違うと，社会的正義のための一致した行動が妨げられる危険も生じると危惧する。

以上みたように，科学においても，現実世界においても，近代主義のもとで構築された理論や枠組みへの信頼が低下した。その結果，近代主義が軽視しあるいは見落としてきた諸現象，近代主義では十分に説明できなかった諸現象に対して注目が高まった。さらに，客観的事実・真実の存在自体に懐疑的になった。ポストモダニズムの語は，こうした状況下の多彩な運動・模索を包括的に指して用いられている。ポストモダニズム興隆の要因は明瞭であるが，その結果展開している動向には多様なものが含まれる。

近代主義が軽視しあるいは見落としてきた諸現象，十分に説明できなかった諸現象は，近代主義の側から見れば，「差異」として立ち現れる。本章では，「差異」の代表的なもの，「差異」を対象とする研究動向を紹介した。それらの研究は，全体に対する説明力はもたないが，「差異」の事象に対してはより的確な説明理論を備えており，「差異」を切り口にして精緻な研究を目指した。これとは別に，「差異」の意味を考察するのではなく，「差異」を理由にして客観的な共通の価値基準や評価手法，客観的な事実・真実の存在を否定して，表象と共同幻想の共有が現実に与える影響に対して関心をもつ研究が増えた。「文化論的転回」と称されるこれらの研究も，ポストモダン地理学のひとつの動向である。同様に，「差異」への関心が目的化し，「差異」の解明の先に見据えるべき研究目的を欠く研究群，研究内容に意味や価値の大小・上下を持ち込むことを嫌う研究もポストモダン地理学の興隆の中で生じた。

４　新たな人文地理学のゆくえ

⑴　ポスト構造主義地理学の誕生：時間地理学から構造化理論を経て

1980年代から90年代のポストモダニズム時代は，新たな研究群の揺籃期ないしるつぼの状態であった。以前からの人文地理学の研究史との相互作用やポストモダニズム時代の新たな展開を経て，徐々にいくつかの潮流が明確化するにいたった。本章では，ポスト構造主義に至る展開過程，ポスト構造主義・ポスト構造主義地理学の成立と特色，関係性の空間に関する地理学について検討し，ポスト構造主義の人文地理学を考察する。

ポストモダニズムの中，見方・捉え方は多様に拡散した。過去にあったような大きなパラダイムの議論はなされず，自分自身の理論的道筋を耕す集団がいくつか存在する。そのなかに，構造主義者ではないが構造主義に関連がある点で共通する人々により，ポスト構造主義が培われた。

人文地理学者そして社会科学者は，概して，個々の作用（人間の働き）と，我々の選択を決定づけたり制限づけたりする構造とが，どのように影響しているのかに関心をもってきた。人々は行動するときに構造に支配されているのか，それとも自分自身の運命は自分自身の決定・行為などの働き（主意主義に基づく行為）の結果なのか。人文地理学では，主に，経済構造や生産関係により社会を診断することと，個々の主体・精神・感覚などの分析で判断することとの両極のなかで，個人の選択を規定する営力について考察した。しかし，マルクス主義地理学と人文主義地理学の二潮流の存在が示唆するように，構造主義と主意主義の二元論を克服することができなかった。もとよりマルクスの構造主義以外にも，レヴィストロース，ソシュールらの構造主義がある。構造主義には，これらも含まれる。ポスト構造主義は，構造主義と主意主義の二元論の限界に挑戦し，構造と主意の相互作用つまり二元論の昇華・止揚に取り組んだ。時間地理学や構造化

理論は，これをめざした取り組みであった。

時間地理学は，Torsten　Hägerstrand ヘーゲルストランドの創案で，個人や集団の時空間の軌跡をダイアグラムとして扱う（T. Hägerstrand 1967）。空間科学モデルが無視した，個人が日常生活で行うミクロスケールの事象に対して，人文主義地理学者のように現象学に傾倒するのではなく，モデル構築をめざした。人々が一定の「プロジェクト：企図」を持って行う時空間行動のパスの表現により，「ステーション：停留地点」，「アクティビティバンドル：活動収束場」，「ドメイン：領域（バンドル形成可能領域）」を示し，活動の制約群に注目する。制約群には，自然の「能力的制約」（睡眠，食事，所与時間内の a→b 地点への移動の不可能など），「一対の制約」（他人と特定の時間・場所に一緒にいることでの制約），「権限的制約」（特定の場所への政治的・経済的・社会文化的理由によるアクセス禁止など）の 3 種類がある。

ヘーゲルストランドは，構造（制約）と作用力（運動・活動）をともに考慮し，時間と組み合わせることで空間を動的に捉えて，人間の行動選択を解釈する枠組みを提供した。外的な制約が特定できることで，人間の行動選択の幅を広げる社会改良に供しうると彼は考え，Bo　Lenntorp レントープ（1976）や Solveig　Mårtensson モルテンソン（1979），さらに都市工学・社会工学による都市の交通・施設計画の改善等の応用研究に継承された。

また，時間地理学は，特定の空間・地域内での諸過程の説明つまり文脈的説明を提示できる。それゆえ，Allan　Pred プレッド（1984）は，時間地理学が活力ある地域地理学の土台になると述べた。地域は，一群の人間・非人間・技術の 3 作用力の絶え間ない運動からなり，すでに確立したものではなく，生成過程にある。この生成は，絶え間ない選択と制約，作用力と構造とのバランスによるが，時間地理学の枠組みを用いて，歴史的・動的な地域地理学が可能になると考えた。

これに対して，社会学者 Anthony　Giddens ギデンズ（1979）は，ヘーゲルストランドの時間地理学に示唆を得て，構造化理論を打ち立てた。時間地理学は，明示的・操作的に人々のパスとバンドルやドメインの制約を示すので実用面でのツールとしての有効性が高い。一方で，毎日の自宅内での家事など，女性に関連深い選択と制約の実態が，ダイアグラム化したパスでは記述できないので，時間地理学の男性主義がフェミニスト地理学により批判された。また，パスを選択する人間の思考，制約形成の背後に潜む権力の特性は，パスと制約群だけではアプローチできない。この点に関しては，時空間行動の契機をなすプロジェクトの種類を念頭においてパスや制約群を整理することで，構造と行為の深層を解読する可能性が得られるとプレッドは反論する（プレッド1981a，1981b，1983，1984）。ギデンズの構造化理論は，時間地理学の操作を具体的に行うものではなく，人間の主意の理解，制約形成の背後に潜む権力に関するアプローチは自身の考えを提示している。ハーヴェイ（1992）や，ギデンズの構造化理論を地理学界に紹介したグレゴリー（1996）は，時間地理学の「構造化」の捉え方を皮相的なものと理解している。その判断の適否は，さらに検討の余地があると思われる。

ギデンズの構造化理論と類似した考えを独自に提示した研究として，クレスウェルによれば，Pierre　Bourdieu ブルデユー（1980，1990）がある。その概要は，次のように要約できる。空間構造は行動を制約・規定するが，それによって行動が完全に固定されるのではなく，その制限のもとで新たな可能性が生まれる。文法は文章を規定するが，それゆえに，同じ文章になるのではなく意味ある新たな文章が生み出される。依拠する基準・構造的諸属性があり，それを用いる人々がいるからこそ，新たな変化・創造も生まれ，共有されて新たに構造化する。個々の行動は構造によって権威づけられ，構造と作用力が絶えず相互に再生産され，どちらかが優先することがない。

ブルデューは,「主観主義」と「客観主義」(日々の行動に対して説明の枠組みを提供する客観的構造があると信じる立場)をともに不十分とみなす。現象学では個別の経験の可能性,何が個々の経験を可能にするのか,どの行動が創造的なのか(なぜその経験なのか,なぜその行為なのか)は説明できない。他方,構造主義は,構造が作用する日々の経験・行為の意味が説明できない。そこで,彼は,構造と作用力(行為者。人の主意や行為)を相互作用に至らしめるメカニズムに関して考え,諸概念を提示している。そのうちもっとも重要なものが habitus である。Habitus とは,意識的に目的を志向せず客観的に行動や表象化を生産し組織化する原理として構造を構造化し,何かの規則や指揮者に従属することなく諸行動を集団的に組織化するもので,「人間の知性・知的能力を能動化させるために人間に内在化されているもの」として,13世紀の神学者 Thomas Aquinas トマス・アクィナスが概念化した用語を,借用している。客観と主観,構造と作用力(行為者。主意や行為)の相互作用,外部(構造)が内部化され,内部(主体性)が構造を生産する。

地理学に則せば,現象学に依拠する主観主義の人文主義地理学や Non-representation theory(非表象理論)も,客観主義のマルキスト地理学も,ともに不十分ということになる。クレスウェルはブルデューの影響をうけて,『場所に/場所から』において,場所を,人々の行動をイデオロギー的に枠付け,かつ行動によってそれ自体が絶えず生産されるものとして説明しようとした(Tim Cresswell 1996)。

ギデンズやブルデューの「構造化」の説明は説得力がある。しかし,説明は明快であるが,操作レベルにおける了解性や蓋然性が十分に担保されたとは思えない。このように判断すること自体が,過度に論理実証主義的と見なされるのかもしれないが。

ところで,構造と作用力(行為者。主意や行為)の相互作用によって,「構造化」を進行形の運動として捉える場合,ポストモダン地理学が抱え

た弱点，すなわち，重要な差異とそうでない差異とをいかに弁別するのかと同じ問題を，ポスト構造主義も抱える。つまり，あらゆる人的作用（行為者の主意や行為）が同じ重みで相互作用して「構造化」がなされるわけではないが，諸作用の中から「構造化」にとって重要な作用をいかに判別できるかの問題である。この打開のため，グレゴリー（1980）を嚆矢として，ポスト構造主義者は，現実主義（実在論）を採用し，それによって，出来事が生じるのに「必要な」条件と「偶発的」条件とを仕分け，「必然的な原因群を特定できるとする。ギデンズやブルデューの研究をその具体的成果として彼らは位置づける（Paul Cloke et al 1991，Andrew Sayer 2000）。

なお，上記のポスト構造主義への歩みに先立って，文化地理学者レイモンド・ウィリアムズが，構造と行為（主意）の二元論の克服に取り組んだ。彼は，『マルクス主義と文学』や『唯物論と文化の問題』において，「感情の構造」や「文化マルクス主義」をはじめとする，対称的と思われる二者の結合を考察対象にして，構造と行為（主意）の二元論の排除をめざした（R. Williams，1977，1980）。ポスト構造主義と同じ目的からで，コスグローヴやジャクソンらの新しい文化地理学の開花に多大の影響を与えた。

これらの取り組みを経て，社会学や人文地理学において，行為に先行して構造が存在するとの考え方を払拭するポスト構造主義の思想が確立した。ポスト構造主義は，「本質主義つまり事物の核心部分は客観的実在であり，事物は必ずその本質を有し，それに規定される」との考えを拒絶する。事象をカテゴリー化する有用性を否定しないが，むしろカテゴリーの形成過程の検討を重視する。カテゴリー化の過程はニュートラルではなく，カテゴリー形成過程にさまざまな意思や権力が顕在化するからである。具体的な検討項目は，差異を生む力を誰が持っているのか，カテゴリーの境界を引く過程はどのようか，カテゴリーは社会生活においてどのように機能しているのか，社会空間でカテゴリー化を実行する力を誰が持っているのか，

などからなる。

ポスト構造主義は，抵抗活動に関する諸研究を通じて，完成されていった。抵抗の存在は，構造が完全ではなく，人々が構造に従うだけではないことを端的に物語っており，ポスト構造主義の好個の対象をなした。ジャクソンの抵抗活動の文化地理（Peter Jackson 1989）やフェミニスト地理学の研究が明示的に口火を切り，文化の世界での権力と抵抗のテーマは人文地理学の主要テーマとなった。ルフェーブルの研究を継承したソージャもこのテーマを扱い，「第一空間」＝プラナーの空間，「第二空間」＝より想像的・表象的で場所とよびうる空間，「第三空間」＝多様に混在し活発で相互に矛盾しあう空間の 3 種類を示す。第三空間は，まさにいまだ確立していない創造的過程にあるポスト構造主義の空間を指す。

ポスト構造主義地理学の確立に最も大きな影響を与えたのは，フーコーであろう。フーコーは，支配をメインテーマに，さまざまな管理システムの誕生について膨大な資料のディスコース分析を行った。社会の統治と個人の意思・倫理に注目して，支配形態の歴史的変化を明らかにし，人格支配に対する個人レベルでの抵抗の必要を喚起した。近代以降の管理統制が，人間の生の掌握，従順な身体への改造をせまること，軍隊・監獄・学校・工場・病院などの空間装置がそのため重要な役割を果たしていることを解明した。たとえば『監獄の誕生―監視と処罰』において，監獄の一望監視施設によって監視されている収容者が自己規制するようになることを示した（Foucault 1975）。地理学者は，フーコーが空間配置を中心に据えて監視と処罰を論じ，空間に能動的役割を与えた点に注目した。フーコー自身も，地理学者のインタビューを受けて，「社会と空間」が自分の関心の中心であることを悟った。フーコーは，さらに，統治性，転位，生政治（biopolitique, biopolitics），言説（discours. discourse）などを造語してポスト構造主義を展開した。

今日のポスト構造主義の重要な概念である「言説（ディスコース）」は，

特定の社会集団・文化集団・諸関係に結びついて規定される言語表現を指し，「言説」分析は，書かれたことや言われたことの意味の解明にとどまらず，個々の表明・表現を一つの系に編成する法則を読み解く作業を行う。長期にわたるテクストの表現を収集し，時間と労力をかけて「言説」の変化を読み解くことを通じて，メディアの影響や効果，社会のその言葉に対する変化を明らかにする。つまり「言説」が生成・実体化をなしとげ，何かを生産することを明らかにする。「イデオロギー」が事象の外部にある真理の観念と客観性に依拠し，ポリティカルエコノミーによって生じる上部構造の一部をなすのに対して，「言説（ディスコース）」はそれ自体の内部にある真理を生産する。イデオロギー分析が状況の真実をあらわにするのに対して，「言説」分析は「言説」によって何が生産されたのかを確定する。それまで名前を与えられていなかった現象に固有の名前が与えられ，その時点にまさに文字通り誕生したものを確定する。

「言説」に地理学者がかかわるのは次の 4 点である。①知識・テクスト・行為・現実はすべて特定の時間と場所の生産物であり，それは普遍的ではなく，文脈的である。「言説」は，非常に空間的な特質をもっている。②「言説」は，発生場所が大変固有である（トイレ・医院・大学・避難所など）。場所が「言説」の発生の正当性をある程度担保する。③地理的知識は「言説」分析に従属しうる。地理学科・地理学界は「言説」が生まれる場所でもあり，「言説」の素材でもある。④「言説」は，「場所」の生産にかかわっている，とりわけ「場所」の中での人々の行為の判断にかかわっている。

「言説」分析は，文化地理学においてまず用いられ，人文地理学の「文化論的転回」により，政治地理学や経済地理学に広まった。存在論に立脚する研究者は，ポスト構造主義に対して，土台がなく，相対的に過ぎ，「言説」の向こうにいったい何があるのかと質問し批判する。

⑵　ポスト構造主義の展開：関係性の空間・場所，非表象理論（NRT），アクターネットワーク理論（ANT）

ポストモダニズム以前には，安定性に富んだ構造をもち，境界により内部と外部が区別される地域・場所・空間の存在を前提として，地域の構造，場所の意味，社会経済と空間の関係を捉えることが，人文地理学の主たる関心であった。ポストモダニズムは，地域・場所・空間が，決して客観的・静態的・安定的ではなく，可変的で多彩で重層的であることを知らしめた。ポスト構造主義は，地域・場所・空間の性質や生成・変化を読み解くことを探求した。空間は表舞台に登場してその比重を高め，多くの学問分野が空間に注目するようになった。また，ポストモダニズムとポスト構造主義は，ともに，二分法からの脱却を模索した。

空間の境界性が弱くしか作用せず，絶えず変化し，内部と外部の両方に意味づけられたアイデンティティをもつ。そのような関係性の空間が，ポスト構造主義時代と称される現代の空間の特徴である。本節では，まず，関係性の空間，関係性の地理学が持つ特色を，Doreen　Massey マッシーの空間論と Robert David Sack サックの空間論との比較検討により明らかにする。

関係性の空間は，内部の要素群が結合し明瞭な境界を持つ存在としての空間観のまさに正反対をなす。現代の空間・場所にとって，常に運動し変化の過程にあることは，きわめて重要なことである。異質な素材・物質が混交して活動し，空間が生成・変化する。空間と，異質な素材の混交・多様性とは同義である（D. Massey 2005）。この即物性ないし空間と事物のアイデンティティを同時発生として理解する考え方が，ポスト構造主義の特徴である。この考え方の典型として，Nigel　Thrift スリフトらが提起する Non-representation theory（NRT：非表象理論。非表象手法）がある（Nigel Thrift 2000，2002，2004）。本節では第二に，NRT を検討する。

「関係性の空間」論では，関係性にこそ本質があると考える。空間内部

の要素・エネルギーが空間の勢力・規模や空間相互の関係を規定する空間論とは対照的に，さまざまな関係が空間を生成すると考える。アクター（の属性）にエネルギーや権力があるのではなく，アクター群が形成するネットワークにおけるアクター間の関係が権力を胚胎する。この関係性の特徴に注目し，そこに新たな地理学のテーマ，地理学の分析の可能性を見出そうとする取り組みに，Jonathan Murdoch マードックの Actor-network theory（ANT：アクターネットワーク理論）がある（Jonathan Murdoch 1997 a，1997b，1998）。本節では第三に，ANT を検討する。

マッシーは，アイザードのもとで立地論を学び，ロンドンの環境研究センター CES に勤めて，アイザードにはない「社会的関係」を組み込んだ独自の「空間的分業」を提起した。成長産業と衰退産業の地域的不均等だけでなく，20世紀後半の産業（製造業）の立地再編について，管理部門と生産技術部門およびこれら各部門内の階層関係を反映した不均等立地を証明し，立地論の社会科学化を促した（D. Massey 1984，1995）。空間と社会的関係との不可分性に注目したマッシーは，ハーヴェイやスミス同様，人間的な社会変化を引き起こす思想体系の構築を掲げて，貧困・富・矛盾あるいはジェンダーへの空間・場所のかかわりを研究しつづけている（D. Massey 1994）。マッシーは，空間あるいは場所を，相互作用の産物であり，多様性・重層性を可能にする領域であり，明確な内部と外部の境界をもたず絶えず建設途上にあると規定する。このような空間・場所・地域の捉え方に立つ地理学を「関係性の地理学」と呼ぶ。ソージャの「第三空間」をはじめ，ポスト構造主義の空間・場所概念はマッシーの空間・場所概念と共通点が多い。

空間概念に関して多くの示唆を与えてきた Robert David Sack サックの議論と対比して，ポスト構造主義の「関係性の空間」概念の特色を明らかにしよう。サック（1977，1981）は，空間の概念化をはかり，対極にある空間概念として，①「Sophisticated-fragmented 人手が加わった本体から

分離した空間」と②「Unsophisticated-fused 人の手が加わっていない本体と融合した空間」を示した。①は，自然科学や社会科学が定式化により，あるいは美術や音楽が絵画や音色で象徴化により，知識や経験を用いて対象化した空間を意味する。これに対して，②は，知識のフィルターを通さない子どもの体験や，未開民族の神話や魔法の中のような，対象としての分離が未完で主体が融合しているあるがままの空間を意味する。①の場合，定式化や象徴化に失敗しても，人々は空間の本体が影響を受けるとは考えないが，②の場合，自分が空間の本体と融合していると感じているので，体験や神話が破綻すると本体そのものが壊れると考える。①では空間と主体が分離しているので，分析や鑑賞の対象として空間を捉えるのに対して，②ではその空間に生きているので，主体は空間を体験し認識するが，分析や鑑賞の対象ではない。①の空間概念に基づいて空間を分析する時，幾何学的性質と本体的性質からなる空間的属性のうち，自然科学は距離や形などの幾何学的性質のみを対象とするので，自然科学の客観的で科学的な見方が適合する。社会科学はほぼ自然科学に倣うが，価値や信念などの本体的性質の部分は，行動科学的アプローチを用いて，認知距離やメンタルマップを求めて空間的属性と主体との関係を求めることになるが，この方法で一般性を導出することは困難であり，個々の行為や本体や環境によりそのつど関係を求めるしかない。一方，美術や音楽では，空間に抱いた感情を主観的に象徴して，主観（空間に抱いた感情）と客観（空間。空間が与える感情）を結びつける行為を行う。造形された象徴が意味をもつのは確かであるが，絵画や音色から空間的属性と主体の関係を客観的に求めるのは不可能である。

ついでサック（1986）は，歴史上の個人や集団による「領域化」を論じる。領域化とは，支配エリアを設けて民衆と事物を支配する権力的な地理的戦略を指し，あらゆる地理的尺度の全人間社会で生じる。土地財産，政治管轄区，職場，家はすべて領域組織の例である。領域化は，第一義的に

社会的権力の地理的表現であり，空間と社会が相互作用する手段であり，その機能変化により社会と空間の歴史的関係が理解できるとした。

上記から，サックは，空間についての包括的な考察，指標に基づく空間概念の諸類型の設定，各空間概念の排他的説明により，全体論を指向している。また，幾何学的性質と本体的性質を内包する社会科学的空間に最大の関心を寄せ，自然科学的アプローチを模した行動科学的アプローチでなく，「領域化」概念により本体的性質に関する事象群の歴史的分析により，人間社会の空間と社会の相互作用とそれが変化する時代的画期を解明することを選択している。また「領域化」に関する説明から，明確な境界設定により社会空間が構築されると考えていることがわかる。つまり，サックの空間研究は，空間の本体的性質を重視するのはポスト構造主義と同じであるが，その方法論は論理実証主義に基づく構造分析であるといえる。

ポスト構造主義の「関係性の空間」分析は，全体論には言及しない。その空間は，境界性が低く，その内部と外部双方と常に多様な関係が重層的に存在する。可変性と重層性を備え，現象と一体的に空間が形成される。アイデンティティは内部・外部双方との関係をつうじて形成される。関係の種類は多彩で，空間と事象との不可分性や空間形成の瞬時性を属性として持つといえよう。

「関係性の空間」は，静態的でなく，関係により生成・変化する。したがって，それにアプローチするのに適した方法の開拓が要請される。スリフトらの Non-representation theory 非表象理論／非表象手法（NRT）は，空間形成を営為する人間に焦点をあてたポスト人文主義のサイドからの方法論開拓の試論である。

ところで，「関係性の空間」は，上記の社会科学的関心から抽出されるだけでなく，むしろ一般的には，現代の生活の中で体験し感じるものである。スリフト＆フレンチは，ソフトウェアが普及する現代，空間が自動的にいともたやすく生産されることに注目し，ソフトウェアが生産する空間

・地理を 3 タイプ紹介し，ソフトウェアの空間が従来の表象とは異なる特性をもち，非常に広範な現象として生起していることを示した（Nigel Thrift and Shaun French 2002）。空間の生産の瞬時性・可変性および生成過程の多様化に関心をもつスリフトは，父の死を契機に発表した論文において，その空間の把握の仕方として NRT を提起した（N. Thrift 2000）。さらに，自然の範疇を超えてテクノロジーにより一種の知として環境が能動的に形成される現代について，生命・生物や知の倫理の面で差し迫った難題を突きつけられていることを喚起した（N. Thrift 2005）。

NRT の考え方はつぎのとおりである。ポストモダニズムの文化地理学は，本質論・存在論を疑問視して真実や現実の客観的存在を否定し，社会的構成概念にすぎない表象が実体化して真実をつくることを強調した。そのことが，世界や空間・場所の創造的瞬間や生の躍動への感性や関心を喪失させ，世界を成りし死したものにしてしまった。スリフトは，表象主義をこのように批判し，「関係性の空間」に生起する誕生の創造的瞬間や生の躍動に，非表象手法 NRT を掲げて，出会い，感じ，交感しようと主張する。スリフトは表象主義を否定しているのではない。表象の向こうにある，あるいは表象の手前にある世界にもっと目を向けようと主張しているのである。

スリフトが NRT の方法を提起するのは，書き言葉以外による方法に期待をよせるからである。書き言葉は事物を価値づけ，知的エリート性を帯びる。テクストやディスコースは単に発せられる言葉や文字ではなく，整理統合された言葉や文字であり，思考を介した事物の把握になってしまう。NRT は，自然に，直接に，生命や創造的瞬間にせまろうとする方法である。理論を論じているのではなく，実践のスタイルである。世界が動いているままに創造や驚きの瞬間に目をむける。それをいかに考えいかに書くかではなく，自分が何をどのようにするかである。サイン，シンボル，テクストは，世界を表現し構造把握する営為なのでいまは傍らに置き，event

と affect すなわち生じている現象と対象に対しておのずとわきあがる感情をてがかりに，出会い，感じ，交感する。

Event（出来事）とは，はかないながらも潜在的可能性をもつ状況，終わってはおらず絶えずなろうとする状態をあらわす。しかも起こっている現象は絶えず別のものに姿を変える可能性があり，定常的でない。NRT 地理学者にとって，世界は絶えず創造的瞬間・躍動や驚きが起こるかもしれず，まさに“event”である。NRT のもう一つの鍵概念 affect（感情）とは，対象に対しておのずとわきあがる感情を指す。自分の中に個人的に巣くうあるいは反対に対外的に表れる emotion とは異なる。affect は対象と出会ったときに始原的に両者の間をゆきかうものである。affect は emotion に先行する。自分が抱いた affect に意味を与えて affect の意味がわかったあとに emotion が生じる。すなわち，affect は，出会いによる関係性の産物であり，かつ表象以前の状態のものである。

Event と affect により，事物の流動性（可変性），意味の生産の進行，関係性の本体論（存在論），世界との瞬間的相互作用，事物が驚きをもって現れる可能性，人＋αとしての生の広い定義，社会的なものを絶えず生産するすべての物質性が，主張される。ダンスは遊びの一つで，ルールはゲームのためにあり，何かのためになされるのではないし，何かの意味を帯びてもいない。しかし，ダンスがなされる空間と行為には表現力と創造力が付与され，喜びや思いがけない可能性が満ちる。NRT は，「関係性の空間」を追究するポスト構造主義の一種であるが，上記のように，ポスト構造主義の古典ともいうべき，フーコーのディスコースによる真理の生産やデリダのテクストが，言葉や文章によって世界を考察・検討して真実の生成を探求するスタイルに対して，批判的である。フーコーやデリダの方法が，「関係性の空間」に触れることに消極的だからであろう。もちろん，最終的には思考の産物で，「関係性の空間」の生成を捉えたのか表象の実体化を確認したのかどちらにも解釈しうるかもしれないが，フーコーやデ

リダにすれば，歴史主義的に資料吟味を徹底し，「関係性の空間」を科学的探求により明らかにしており，NRT 地理学者による批判は主観的で当を得ていない。

ダンスに表れる創造的瞬間・驚きが明の誕生だとすれば，反対に暗の誕生もある。Dark affect（暗い感情）と呼ばれる。Ben Anderson アンダーソン（2006，2010）は，暗い感情について論じ，動物の屠殺――ホロコースト――拷問の例を挙げている。さらに，フーコーの「空間と社会」の関係を応用し，確認された暗い感情の制御を行う，精神分析の地理学が現れている。Peter Adey アディ（2008，2009）は，空港の建物が，安全の観点から，移動前の人々の感情のコントロールをいかに計算して，先手をとって予防的に整備されているかを明らかにしている。そこにはまた，人の表情やしぐさを読み取り，直後の行動を予測する，最新の技術が大きく関わっており，まさにフーコーの言う「生政治」が目の当たりにある。

「関係性の空間」やスリフトらの研究がのべるように，今日，人間・非人間（多様な生物）・テクノロジー（非生物）が相互に容易に結合しあい，新たな関係性の空間が形成される。行為主体間の関係網，ときには表面にも現れず行為者相互が地下茎で結ぶ関係網によって「関係性の空間」が生成する。この現象は地理学の新たな分析を要するテーマである。Bruno Latour ラトゥールに依拠して，アクターネットワーク理論（ANT）によりこのテーマを追求したマードックは，ANT は，人間と非人間とテクノロジーなど無生物のネットワークにより地理学の研究を展望するので，人文地理学の枠組み自体の変更をせまるとする。

ANT の考え方は次のとおりである。二元論を超克する理論を展望するとき，人間中心の見方では世界をつくり，我々が依存する非人間を十分考慮に入れることができない。ラトゥールはパスツールのワクチン開発を例に，実験室で検査し，社会で治験して，社会での感染をなくすことで，実験室と社会が一連の場として結びつくことの重要性を指摘し，このネット

ワークの形成に研究者が中心的役割を果たす必要を主張した。権力は，アクター間で確立している関係に所在するからである。そのためには，研究者が，アクター相互が課題を共通理解できるように「翻訳」し，アクター相互が課題をめぐる役割を了解しあうようにすることが大切である。Michel　Callon キャロン（1986）に基づけば，社会と自然が両方とも科学者の号令に同じように従い，「翻訳」の 4 段階（①問題化：他地域での知見を対象地に移植できるかを検討し，他のアクター群にネットワークを結ぶよう呼びかける，②利害化：各アクターにアイデンティティを課し，それぞれのアクターの役割を指定しかつ全体がその役割を受け入れるよう調節する，③加入登録：各アクターが役割を理解し，他のアクターを信用し，課題遂行のためネットワークの形成に登録する，④動員・結集：研究者が実験室で行った実験を社会に拡大して実施し，他のアクター群は研究者の指図に従って行動し，ネットワークで結ばれて，成果を得るよう行動する）を実現することである。

ANT は自然や技術などの異質なアクターとネットワークを結ぶので，アルゴリズムに依拠できず，試行錯誤により，「翻訳」の 4 段階を遂行する。ANT を実践する空間には，「処方箋の空間」と「交渉の空間」と呼びうるものがあり，アクター間相互の役割調節・信用・分担等を通じて，アクター間で自律的に遂行のための微調整を行う。また，確固とした絶対空間があまり存在しない現代において，これら一連の事象は，アクター間の「関係性の空間」において，そしてマージナリティ，異質混交，抵抗と違反などともかかわりながら構築される（J. Murdoch 2006）。

ポストモダニズム後に展開したポスト構造主義の動向をおおむね提示した。そのなかで，「関係性の地理学」の検討を通じて，空間，場所，スケールなど，地理学の基本概念について，ポスト構造主義地理学が，それまでの人文地理学といかに異なった考え方をするのかが明らかになった。NRT は，科学的研究と信仰ないし感覚との境界に位置する視角のように

思える。構造の否定は大理論の否定だけでなく，経験論的アプローチの否定にも通じる。経験的判断が感覚を要素に含むと考えれば，ポスト構造主義とりわけ NRT は，経験や感覚に対して，NRT とそれ以前の研究の間で，基準を使い分けていることになり，矛盾があることになる。

5　結びにかえて

小論では，ポスト「ポスト構造主義」，およびポスト人文主義に関する新たな研究動向について，十分言及できなかった。

たとえば，ANT は，多くの人文地理学研究が，生物・無生物の区別を越えた研究領域に踏み出していることを示した。この，「人文地理学以上のテーマ」については，ANT 以外にも，動物地理学（人間と動物の交渉，動物の表象や動物性が我々のアイデンティティにどのように関連するかなどの研究），Hybrid　geographies（混成の地理学。遺伝子組み換え大豆を始めとした自然と文化の境界の線引きの難しさ，自然と文化（社会）が混成状態にある現代に典型的な地理現象の研究）などがある（Sarah　Whatmore, 2002）。

また，文化論的転回後のポスト人文主義の研究に，psychoanalytic geographies（精神分析の地理学）が誕生している。P.　アディの研究例により一端は紹介したが，社会科学とは異なる指向性で，心理学（人文科学と自然科学）をよりどころに，社会的有用性も念頭においた知的探求が進行している。

思想史との深い交流を通じて生起している新たな主題群についても，渉猟すべき視圏があろうが，今後の課題としたい。

最後に，人文地理学と自然地理学に関して，述べておきたい。小論で概観したように，今日の人文地理学は，「社会と空間」に関わる研究が多彩

に展開されている。これに対して，自然地理学は，これまで「環境（と人類）」が研究の主流をなしてきた。20世紀後半以降，開発行為や技術革新による地球や生物の不可逆的な改変を踏まえて，地球環境問題は差し迫った課題になって久しい。「環境と人類」と（）をはずした状態の真っ只中にいるといえるかもしれない。気候学では気候変動，都市のヒートアイランド，異常気象などが最近20年間の重要な研究テーマとなっている。災害の発生，頻度と規模の拡大，計測技術の進歩に伴い，予測・予防への関心が高まっている。地形の人為的改変がもたらす破綻も顕在化してきている。人類の活動に起因する過度の開発や破壊に対して，保全・保護が必要性を高めている。現代の直接的な効用とともに，自然地理学ゆえに可能な，第四紀＝人類時代の時間軸における研究も，必要性を増すであろう。

人類による地球改変の程度と速度は指数関数的である（Wilbur Zelinsky 1970）。人類と自然の関係に関して，上記の応用的研究が，今後，まちがいなくシェアを拡大すると思われる。自然地理学を構成する諸分野は，共通して上記の諸課題に向き合うことになろう。

このような自然地理学の動向に関して，欧米と日本を比較したとき，地理学だけのことではないが，日本ではこれまで，「社会」を研究にビルトインする視角が弱かったように思う。ANT の「翻訳」の説明で述べたように，実験室あるいは研究と社会が一連の場として結びつかなければならない。しかし，日本では，成果の社会への発信は行うが，それは事後的で，社会を自覚的に組み込んで研究する視角に乏しかった。

その点で，自然地理学は「環境と社会」を視野に入れ，人文地理学と自然地理学が，「社会」を結合契機にして，新たな地理学の展開を模索することができるのではないか。もとより，それを全体に強調しすぎることは，ゆるく統合された地理学にとって，適切でない。人文地理学における多様化や研究領域拡大の動向も，自然地理学に託される課題とともに，人類史を踏まえた共通の価値観に基づいて，「地表」概念を拡張する状況の一こ

まとして位置づけることができよう。

ともあれ，小論は人文地理学がさまざまな衣装をまとうに至ったことを示したが，衣装はあくまでも着る本人が選んでいることが確認できた。ゆるく統合された地理学の歩みは，これからも続くものと思われる。

参考文献

Peter Adey, 2008, Airports, mobility and the calculative architecture of affective control, *Geoforum*, 39, 438–451.

Peter Adey, 2009, Facing airport security: affect, biopolitics, and the preemptive securitization of the mobile body, *Environment and Planning D: Society and Space*, 27, 274–295.

Ben Anderson, 2006, Becoming and being hopeful: towards a theory of affect, *Environment and Planning D: Society and Space*, 24, 733–752.

Ben Anderson, 2010, Morale and the affective geographies of the"War on Terror", *cultural geographies*, 17, 219–236.

Pierre Bourdieu, 1980, *Le sens pratique*（1990, *The Logic of Practice*, Stanford University Press, Stanford, CA.）

Michel Callon, 1986, Some elements in a sociology of translation: domestication of the scallops and fishermen of St. Brieuc Bay, in *Power, Action, Belief*, ed. J. Law, 19–34, Routledge and Kegan Paul, London.

Paul J. Cloke, Chris Philo and David Sadler, 1991, *Approaching Human Geography: an introduction to contemporary theoretical debates*, Sage, London.

Tim Cresswell, 1996, *In Place/Out of Place: Geography, Ideology, and Transgression*, University of Minnesota Press, Minneapolis.

Mike Davis, 1992, *City of Quartz: excavating the future in Los Angeles*, Verso, London & New York.

Michael Dear, 2000, *The Postmodern Urban Condition*, Blackwell, Oxford.

Jacques Derrida, 1974, *Grammatologie*（1976, *Of Grammatology*, Johns Hopkins University Press, Baltimore.

Michel Foucault, 1975, *Surveiller et punir: Naissance de la prison*（*Discipline and Punish: the birth of the prison*, Vintage Books, New York.）

（田村俶訳，1977，『監獄の誕生―監視と処罰』新潮社）

Michel Foucault, 1986, Of other spaces, *Diacritics*, 16, 22–27.

Clifford Geertz, 1973, *The Interpretation of Cultures: selected essays*, Basic Books, New York.

Anthony Giddens, 1979, *Central Problems in Social Theory: action, structure and contradiction in social analysis*, University of California Press, Berkeley.

Derek Gregory, 1981, Human agency and human geography, *Trans Inst Br Geogr NS*, 6－1，1－18.

Derek Gregory, 1996, Areal differentiation and post-modern human geography, in *Human Geography: an essential anthology*, eds. J. A. Agnew, D. Livingstone, and A. Rogers, Blackwell, Oxford.

Torsten Hågerstrand, 1967, *Innovation Diffusion as a Spatial Process*, University of Chicago Press, Chicago.

Brian J. Harley, 1989, Deconstructing the map, *Cartographica*, 26, 1－20.

Peter Jackson, 1989, Maps of *Meaning: an introduction to cultural geography*, Unwin Hyman, London.

（徳久球雄・吉富　亨訳，1999，『文化地理学の再構築：意味の地図を描く』玉川大学出版部）

Peter Jackson, 1993, Changing ourselves: a geography of position, in *The Challenge for Geography: a changing world, a changing discipline*, ed. R. J. Johnston, 198–214, Blackwell, Oxford.

Bo Lenntorp, 1976. Paths in space-time environments: a time-geographic study of movement possibilities of individuals, *Lund Studies in Geography, Series B*, No. 44.

Sallie A. Marston, John Paul Jones III and Keith Woodward, 2005, Human geography without scale, *Trans Inst Br Geogr NS*, 30, 416–432.

Solveig Mårtensson, 1979. On the formation of biographies in space-time environments, *Lund Studies in Geography, Series B*, No. 47.

Doreen Massey, 1984, 1995, *Spatial Divisions of Labour: social structures and the geography of production*, Macmillan, London.（2nd ed 1995）

Doreen Massey, 1994, *Space, Place, and Gender*, University of Minnesota Press, Minneapolis.

Doreen Massey, 2005, *For Space*, SAGE, London

Jonathan Murdoch, 1997a, Inhuman/nonhuman/human: actor-network theory and the prospects for a nondualistic and symmetrical perspective on nature and society, *Environment and Planning D: Society and Space*, 15, 731–756.

Jonathan Murdoch, 1997b, Towards a geography of heterogeneous associations, *Progress in Human Geography*, 21－3，321–337.

Jonathan Murdoch, 1998, The spaces of actor-network theory, *Geoforum*, 29－4，357–374.

Jonathan Murdoch, 2006, *Post-Structuralist Geography: a guide to relational space*, SAGE, London.

Chris Philo ed., 1995, *Off the map: the social geography of poverty in the UK*, Child Pov-

erty Action Group, London.

Chris Philo ed., 2008, *Theory and Methods: critical essays in human geography*, Ashgate, Aldershot.

Allan Pred, 1981a, Of paths and projects: individual behavior and its societal context, in *Behavioral geography revisited*, ed. Reginald Golledge and Kevin Cox, 231–55, Methuen, London.

Allan Pred, 1981b, Power, everyday practice and the discipline of human geography. In *Space and Time in Geography: essays dedicated to Torsten Hägerstran*d, ed. Allan Pred, 30–35, C. W. K. Gleerup, Lund.

Allan Pred, 1983. Structuration and place: on the becoming of sense of place and structure of feeling, *Journal for the Theory of Social Behavior*, 13, 45–68.

Allan Pred, 1984, Place as historically contingent process: structuration and the time-geography of becoming places, *Annals of the Association of American Geographers*, 74 (2), 279–297.

(西部　均　訳, 2004, 歴史的にコンティンジェントな過程としての場所――構造化と場所生成の時間地理学――,『空間・社会・地理思想』9, 148–167.)

Robert David Sack, 1977, Geographic and other views of space, in *Dimensions of Human geography: essays on some familiar and neglected themes*, ed. Karl W. Butzer et al, 166–184, The Department of Geography, The University of Chicago, Chicago.

Robert David Sack, 1981, *Conceptions of space in Social Thought: a geographic perspective*, University of Minnesota Press, Minneapolis.

Robert David Sack, 1986, *Human Territoriality: its theory and history* (Cambridge Studies in Historical geography 7), Cambridge University Press, Cambridge.

Andrew Sayer, 2000, *Realism and Social Science*, Sage, London.

Edward W. Soja, 1989, *Postmodern Geographies: the reassertion of space in critical social theory*, Verso, New York.

Edward W. Soja, 1996, *Thirdspace: journeys to Los Angeles and other real-and-imagined places*, Blackwell, Oxford.

Edward W. Soja, 1999, Thirdspace: expanding the scope of the geographical imagination, in *Human Geography Today*, eds. D. Massey, J. Allen, and P. Sarre, 260–278, Polity, Cambridge.

Edward W. Soja, 2000, *Postmetropolis: critical studies of cities and regions*, Blackwell, Oxford.

Nigel Thrift, 2000, Afterwords, *Environment and Planning D: Society and Space*, 18, 213–255.

Nigel Thrift and Shaun French, 2002, The automatic production of space, *Trans Inst Br Geogr NS*, 27, 309–335.

Nigel Thrift, 2004, Remembering the technological unconscious by foregrounding knowledges of position, *Environment and Planning D: Society and Space*, 22, 175–190.

Nigel Thrift, 2005, From born to made: technology, biology and space, *Trans Inst Br Geogr NS*, 30, 463–476.

Sarah Whatmore, 2002, *Hybrid Geographies: Natures, Cultures, Spaces*, SAGE, London

Raymond Williams, 1977, *Marxism and Literature*, Oxford University Press, Oxford.

Raymond Williams, 1980, *Problems in Materialism and Culture: selected essays*, New Left Books, London.

Wilbur Zelinsky, 1970, Beyond the exponentials: the role of geography in the great transition, *Economic Geography*, 46, 499–535.